

Vol.2 2023・3

2022 年度

# しんあい教育研究ケアセンター活動報告



大阪信愛学院大学

# 目 次

はじめに	
まちの保健室 .....	1
学んですこやか 健康教育セミナー .....	3
医療的ケア児・家族のための防災プロジェクト .....	5
地域での ACP 普及を目指した住民参加の会を開催するための、 地域活動従事者(行政・医療・保健・福祉)との連携と住民の ACP に関するニーズ把握 .....	7
前向き子育てプログラム(トリプルP)の実践 .....	9
子どもの虐待予防にむけた研修会の開催 .....	11
董地域活動協議会百歳体操活性化プロジェクト .....	13
幼児期の「縄跳び遊び」における段階的学習に関する一考察 .....	15
思春期セミナー .....	17
チャペルコンサート .....	19
大阪市城東区、鶴見区および近隣地域における外国人生活者の実態と 支援ニーズに関わる基礎調査 .....	21
門真市立図書館 読み聞かせボランティア .....	23
近隣の幼稚園、小学校、中学校等に対するスクールサポート事業 .....	25
親子参加型連続講座 鶴見区役所保健福祉課が主催する講座への協力事業 .....	27
公民連携子どもの居場所「子ども LOBBY」 保育園・幼稚園の先生体験講座 .....	28
教育相談(のばら) .....	29

## はじめに

しんあい教育研究ケアセンターは2021年4月大阪信愛学院の附属施設として開所され、2022年4月の大阪信愛学院大学の開学にともない、大学附属施設として新たな出発をしました。

本センターは、高等教育機関としての社会的責任を果たすため、本学の建学の精神に基づき、地域社会に対する貢献と有機的連携の実現に努めるとともに、学術研究及び教育水準の向上を図ることを目的と定めております。この目的の達成のため、地域連携、学術研究、教育研修、地域ケア、国際交流の5部門を置き、各種研究・事業を展開して参ります。

昨年度は「教育相談(のぼら)」「まちの保健室」の2件の事業でスタートしましたが、本年度は16件の研究・事業に大きく発展しました。研究・事業の内容は5つの部門すべてに関わるとともに、対象も乳幼児から児童、青年、成人、高齢者までほとんどすべての発達段階を網羅しております。そして、もうひとつの大きな特徴は、人が生きていくことに大きな関心を持ち、ウェルビーイングを支援していくことを共通のコンセプトとした教育学部と看護学部の強みを生かした活動であることといえます。また、2学部という小さな大学であるからこそ、お互いの顔が見える関係の中で地域に根付いた活動ができるものと思っています。

ここに2022年度本センター活動報告を刊行できますことに、関係のみなさまには厚くお礼申し上げます、今後も充実した活動をめざして参りますので、一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

しんあい教育研究ケアセンター長 齊藤 誠一

## 「まちの保健室」活動報告

阪上 由美 岡崎 裕子 美王 真紀 南 裕美

10月4日(火)、12月6日(火)

2023年2月7日(火)の10時から12時

### (3) 地域からの依頼「まちの保健室」

月日	地域	活動場所
6月21日	董地域活動協議会	すみれいこいの広場
7月1日	董鯉江東地域包括支援センター	相談広場
7月30日	董地域活動協議会	すみれフェスティバル
9月14日	門真市	まちの保健室
9月21日	関目東地域活動協議会	関目東ふれあい喫茶
11月6日	大阪信愛学院大学学祭	まちの保健室
11月15日	董地域活動協議会	すみれいこいの広場

### (4) 大阪万博「TEAM EXPO 2025」共創チャレンジ「つるりっぷ保健室」

場所：焼野地域活動協議会 スポーツ健康フェスタ  
日時：2023年2月5日(日)10時～12時

### 1. はじめに

日本看護協会は、2001年度より看護職が地域で展開する疾病予防や健康増進のための相談事業として「まちの保健室」を展開している。本学院も「しんあい教育研究ケアセンター」(以下、本センター)の事業の一つとして、2021年10月から「まちの保健室」を開設し、地域への貢献および地域に目を向けることができる学生を育成するための場となることを期待し、スタートした。

開設2年目は、引き続き、大阪府看護協会から後援をいただき、連携協力に関する協定を締結している城東区・鶴見区において、施設型と出張型の「まちの保健室」を実施した。施設型は本センター、出張型は鶴見区にあるイオンモール鶴見緑地と城東区大学周辺の地域活動協議会において開催した。また、2022年度から、大阪万博「TEAM EXPO 2025」共創チャレンジ「つるりっぷ保健室」を鶴見区と連携し始動した。ここに、2022年度の「まちの保健室」の活動について報告する。

### 2. 目的

本センターにおける「まちの保健室」の事業目的は以下の通りである。

- 1) 地域の全世代の住民の心身の健康、子育て、生活習慣病予防、介護等の様々な不安や悩みに対し気軽に話せる場を提供し、健康づくりをはじめとした健康管理・増進への貢献に寄与する。
- 2) 地域の医療・福祉・保健に関する組織・団体と連携し、地域のニーズに応じた健康関連のまちづくりに参画する。

### 3. 「まちの保健室」活動

#### 1) 場所と日時

##### (1) 施設型「まちの保健室」

場所：しんあい教育研究ケアセンター

日時：2022年4月26日(火)、7月5日(火)、  
9月6日(火)、11月1日(火)

2023年3月7日(火)の10時から12時

##### (2) 出張型「まちの保健室」

場所：イオンモール鶴見緑地 2階ペルーナ前

日時：2022年6月7日(火)、8月2日(火)、



#### 2) 活動実績

##### (1) 施設型「まちの保健室」

施設型の実施内容は、血圧測定・血管年齢測定・骨密度測定、身長・体重測定後の健康相談・育児相談である。全5回実施し、来所者は延べ64名であった。来所者層は、60歳以上72%、60歳未満28%であった。2022年度より来所数の伸びはなく、リピーター来所者はいたものの、呼び込みによる来所者の方が多かった。

2022年度 施設型実績

月日	来所者数	健康相談		子育て相談	測定のみ
		60歳以上	60歳未満		
4月26日	18	14	4	0	0
7月5日	13	10	3	0	0
9月6日	9	5	4	0	0
11月1日	9	6	3	0	0
3月7日	15	8	2	1	5

(2) 出張型「まちの保健室」

出張型の実施内容は、血圧測定・血管年齢測定後の健康相談・育児相談である。5回実施し、来所者は、延べ130名であった。来所者層は、60歳以上の高齢者層が79%を占めていた。来所呼びかけをしても、子育て世代層は自分事ではないという感じで断られる傾向にあった。

2022年度 出張型実績

月日	来所者数	健康相談		子育て相談	測定のみ
		60歳以上	60歳未満		
6月7日	38	23	6	0	9
8月2日	29	22	5	0	2
10月4日	27	20	3	0	4
12月6日	20	12	8	0	0
2月7日	16	14	2	0	0

(3) 地域からの依頼「まちの保健室」

城東区葦鯨江東地域包括圏域の地域活動協議会の依頼で「まちの保健室」を実施した。平均来所者数は約20名であった。すみれフェスティバルや大学学祭等のイベント時は60名近くの来所者があり、若い世代の方も健康相談を受けられた。

(4) 大阪万博「TEAM EXPO 2025」共創チャレンジ「つるりっぷ保健室」

2022年度をキックオフとして、3年かけて、鶴見区12地域活動協議会で健康相談を実施する。今回は、焼野地域活動協議会「スポーツ健康フェスタ」で実施し、50名の来所者があった。

4. 今後の展望

施設型と出張型の特徴を活かしながら、2023年度も毎月第一火曜日に「まちの保健室」を実施する予定である。2021年度と来所者数の変化がなかったため、2023年度は、各回15分程の健康関連ミニ講座の開催や来所者への特典等も検討している。また、リピーター来所者を増やすため、本年度から健康手

帳を導入した。引き続き、健康手帳を活用し、継続して健康管理や健康相談ができるようにする。

来所者の年齢層は、60歳以上の高齢者層であった。子育て世代や平日仕事をしている働き世代の住民への健康管理・増進への取り組みや事業については、地域からのイベント等に参加しながら、継続して検討が必要である。

学生ボランティアに関しては、火曜日開催が授業と重なり、「まちの保健室」に学生が参加できる機会が少なかった。休み期間の学生ボランティアへの周知等を行い、学生が住民への健康管理・増進への取り組みや事業に関わることができるよう支援が必要である。

謝辞

ご来所くださった地域住民の皆様や連携協力に関する協定を締結している城東区・鶴見区の皆様、ご後援いただいた大阪府看護協会の皆様、関係機関の皆様、開催にあたる場所の提供をくださったイオンモール鶴見緑地の皆様、看護学部の教員、総務課、ご支援・ご協力くださった全ての皆様に深く感謝いたします。

大阪信愛学院大学  
しんあい教育研究ケアセンター

日程 時間  
2022年 4月26日(火)・7月5日(火)  
9月6日(火)・11月1日(火)  
2023年 3月7日(火)  
いずれも午前10時～12時

場所  
大阪信愛学院大学  
しんあい教育研究ケアセンター内  
大阪府城東区古市2-7-30

出張型「まちの保健室」開催!

日程 時間  
2022年 6月7日(火) 10時～12時  
8月2日(火) 10時～12時  
10月4日(火) 10時～12時  
12月6日(火) 10時～12時  
2023年 2月7日(火) 10時～12時

場所  
イオンモール鶴見緑地  
2階 ベルーナ前

まちの保健室  
保健師、助産師、看護師が対応!!

血圧測定、  
血管年齢測定、  
骨密度測定も  
できるよ!

心とからだの健康、  
やけどしるがけいびく  
生活習慣病が心配

子育て相談したい

色々な人と  
おしゃべり  
したいな

介護のことを  
おしえてほしい

城東区・中央区と大阪信愛学院は、連携協力に関する協定を締結し、区民の健康増進を推進しています。  
お問い合わせ：06-6939-4391(代)  
大阪信愛学院大学 しんあい教育研究ケアセンター carecenter@osaka-shinai.ac.jp

## 「学んですこやか 健康教育セミナー」活動報告

郷司 律子

### 1. はじめに

女性は初経以降閉経まで、ホルモンの変動による心身への影響をうける。中でも思春期は影響も大きく重要な時期である。したがって、この時期の変化について必要な知識を持ち、自分で対処できることが望まれる。

また、女性ホルモンが減少する更年期の心身の変化についても困難を抱えている女性がいるにもかかわらず、十分な対処をするだけの知識の獲得ができているとは言い難い。

これらの状況から、思春期と更年期に焦点をあてて、今年度の活動を実施したので報告する。

### 2. 目的

女性のライフサイクルに伴った心身の変化についての正しい知識を女性自身や周りの方が知ることによって、すこやかに過ごす方法を自身で選択できるように支援する。

### 3. 活動実績

以下の内容で活動した。

- 1) セミナー 「正しく知ろう！子宮頸がん予防ワクチン接種」  
日時：4月23日（土） 13:30～15:00  
場所：大阪信愛学院中学校・高等学校  
8階AVホール  
松尾教授と実施した。  
参加者：（対面）13名  
（オンライン）21名 合計 34名  
中学校・高等学校生徒及び保護者  
短大生 高等学校教員
- 2) 高大連携授業 「正しく知ろう！子宮頸がん予防ワクチン接種」  
日時：5月19日、20日、6月2日、16日  
（合計4回）  
場所：大阪信愛学院中学校・高等学校8階  
AVホール  
松尾教授と実施した。  
参加者：医療選考コース 2年生23名 3年生  
25名

### 3) 月経教育「自分の身体のことを知ろう」

日時：10月21日（木）14:20～15:00

場所：マリアンホール

松尾教授と実施した。

参加者：大阪信愛学院高等学校2年生 101名  
アンケート結果を高校へ報告した。

### 4) 保護者向け研修（大阪信愛学院中学校）

日時：12月24日（土）13:00～14:00

場所：しんあい教育研究ケアセンター

講師：齊藤教授

参加者：保護者 2名 教員 2名

### 5) 相談窓口 解説（試行）

「月経のことなんでも相談してください」

松尾教授と実施した。

広報は、リーフレットにて保護者へも配布した。

日時：1月13日（金）～26日のうち4日間

場所：保健センター

参加者：予約者 5名

相談実施者 3名

### 大阪信愛学院高等学校 女子生徒の皆様へ

高校時代は月経（生理）周期が徐々に安定、完成していく時期です。しかし、様々な原因により周期が乱れたり、不快な症状が強くなったりします。月経のこと悩んでいたり、誰かに相談したいと思っている人はいませんか。今回、以下の日程で保健センター担当者が相談に応じます。是非、ご利用ください。

### 月経（生理）の悩み相談窓口開設

1人20分程度 予約制

QRコードから相談希望の予約をお願いします。

日時が決定したら メールで連絡します。

申し込み期限：1月10日（火）12時

1月13日（金）	12:30～13:30	16:00～17:00
1月19日（木）	12:30～13:30	16:00～17:00
1月20日（金）	12:30～13:30	16:00～17:00
1月26日（木）	12:30～13:30	16:00～17:00

担当：松尾（婦人科医師）・郷司（助産師）

場所：学院保健センター（大学本館1階）※購買部のある校舎

相談内容は、月経（生理）に関するどんな小さなことでもかまいません。  
みなさんが話したことを他のだれかに話すことはありません。

6) 公開講座

「更年期のすごし方・ささえ方」

日時：2月25日（土）13:30～15:00

場所：学院ホール

松尾教授と実施した。

参加者：32名（うち大学関係13名）

日本母性衛生学会 公開講座助成金事業

大学と連携している地域への広報を行った（門真市、守口市、城東区、鶴見区）。

7) 出前授業「じぶんのからだはだれのもの」

日時：3月1日（水）10:40～11:30

場所：大阪信愛学院中学校・高等学校  
5階教室

参加者：大阪信愛学院中学校3年生 14名（欠席2名）

4. 今後の展望

活動を振り返ると、活動内容としては、思春期や更年期に対する活動ができた。

しかし、参加状況は十分とは言えず、多くの方に参加してもらうための広報の方法やセミナー内容の検討が課題である。また、子宮頸がんワクチン接種に関しては、接種率が増加しないという施策そのものの課題もあるため、継続的に調査・活動を進めていく必要があると考えている。

謝辞

活動にご協力いただいた、高校の生徒、教員の方に感謝申し上げます。



# 「医療的ケア児・家族のための防災プロジェクト」活動報告

阪上 由美 足高 壱夫

## 1. はじめに

地域で暮らす難病や障害をもつ子どもは、人工呼吸器や経管栄養などの医療的ケアが必要であることが多く、地震や台風などの自然災害の際、電源装置や消毒液・マスク等の衛生用品の確保、避難所や在宅避難等の状況に応じた避難など、いくつもの課題に直面する。

2013年度の災害対策基本法の一部改正により、災害時要援護者対策の制度や仕組みは整いつつあるが、医療的ケアを必要とする子どもの災害時支援計画を作成している自治体は2割にも満たないという報告もある(森脇, 2020)。一般的に、災害時の助けとなる割合は「自助=70%」、「共助=20%」、「公助=10%」と言われており、災害の規模が大きくなればなるほど、行政の対応力は小さくなり、自助・共助の重要性が増し、地域ぐるみの災害対策が大切となる。しかし、難病や障害をもつ子どもの特性を踏まえた災害時の備えや避難行動・訓練を具体化されている地域は少ないのが現状である。そこで、指定避難所となっている大阪信愛学院大学の附属施設である「しんあい教育研究ケアセンター」の特色をいかして、福祉避難所等の協定を城東区と締結し、福祉避難所をハブ拠点とした地域防災力を高めるプロジェクトを立ち上げた。

なお、本プロジェクトの発足にあたっては、すでに城東区保健福祉課、城東区社会福祉協議会、城東区障害者基幹相談支援センター、大阪府立光陽支援学校、その他保健医療福祉機関からプロジェクトの趣旨・活動に賛同を得られている。

ここに、2022年度の「医療的ケア児・家族のための防災プロジェクト」の活動について報告する。

## 2. 目的

災害時のハブ拠点となる福祉避難所開設を目指した地域防災力を高めるプロジェクトの企画運営を行う。

- 1) 医療的ケア児者を支援する保健・医療・福祉・教育における防災の取り組みと課題を明らかにする。
- 2) 医療的ケア児者を支援する多職種間の連携：平時における顔の見える関係づくりを行う(防災を通じて連携支援体制を構築する)。

## 3. 活動実績

### 1) 定例会の実施

場所：しんあい教育研究ケアセンター

日時：2022年5月17日(火)、6月21日(火)、7月19日(火)、9月27日(火)、11月8日(火)、2023年2月7日の14時から16時

参加者：城東区保健福祉課、城東区社会福祉協議会、城東区障がい者基幹相談支援センター わくわく、大阪府光陽支援学校、有限会社オールケア旭、放課後等デイサービス・ルナ、株式会社familink、当事者家族2名

各回、参加者は12-16名であった。

月日	議事内容
5月17日	①2022年度しんあい教育研究ケアセンター事業申請 ②防災の取り組みと課題
6月21日	①防災と福祉の連携による個別避難計画作成促進事業 ②災害時個別支援計画(案)の報告(2名)
7月19日	①「しんあい教育研究ケアセンター」の場所活用について ②区との協議推進、③災害時個別支援計画報告(1名)
9月27日	①「医療的ケア児者・家族のための防災ネットワークセミナー」について、②災害時個別支援計画(案)の報告(2名)
11月8日	①「医療的ケア児者・家族のための防災ネットワークセミナー」の企画・運営について
2月7日	①「医療的ケア児・家族のための防災ネットワークセミナー」の振り返り、②次年度の計画について

### 2) セミナー開催

場所：大阪信愛学院大学 学院ホール

日時：2022年12月17日(土) 14時~16時

セミナータイトル：医療的ケア・重度身心障害児者を中心として～防災ネットワークセミナー～  
当事者・支援者が手をつなぐために必要なこと

### 内容

1部	講演① 大阪大学人間科学研究科 石塚裕子 先生 テーマ：防災×福祉×まちづくりー誰もが助かる社会をつくるために 講演② NPO 法人 輪母ネットワーク 吉田琴美様、田中美紀様 テーマ：：防災を通してつながる支援の輪～防災の活動から見えてきた大切なこと～
2部	パネルディスカッション

参加者は38名であった。



(1) アンケート結果 (アンケート回収率 91.3%)

①参加者の職種

職種	n(%)
医療職	5(23.8)
福祉職	8(38.2)
教育職	1(4.7)
行政職	1(4.7)
当事者家族	4(19.1)
その他	2(9.5)

②参加したきっかけ

項目	n
防災に興味があった	10
防災に関する実践を行っている	5
今後の防災対策の参考にしたい	7
チラシをみた	4
誘われた	1
その他	1

③セミナー参加後の防災ネットワークに対する意識の高まり

項目	n(%)
非常に高まった	14(66.7)
少し高まった	6(28.6)
未記入	1(4.7)

④自由回答

「地域における医療が必要な要援護者のためのネットワーク構築のために必要なことについて」、以下自由回答があった。

＊フォーマル・インフォーマルの多職種等での連携をもって構築すべきである。

＊地域イベントとのコラボやまちづくりの話あいに参加することである。

＊定期的にセミナーを開催して交流の場を作る。

＊お互いの顔を知る、出会う場を作る。

＊知っていただくこと、繋がること、発信すること、継続していくこと。行動しないと何も始まらない。

＊受動的ではなく、当事者も自ら発信する。自助力をつけなければと思いました。

＊障害のある方もない方も災害時助かる社会にするためには、まず近隣で地域でつながる機会が必要だと思います。

＊地域と繋がれない当事者と家族がどうやって地域とつながれるか。



4. 今後の展望

本プロジェクトの今年度の目的は「医療的ケア児者を支援する多職種間の連携：平時における顔の見える関係づくりを行う」であった。まずは、本プロジェクトに賛同いただくプロジェクトメンバーを招集するために、2021年度から関係機関に伺い、本プロジェクトを立ち上げる目的等を伝えるという前準備があったからこそ、2022年度初めから企画・運営できたと考える。

2021年9月から医療的ケア児支援法が施行され、様々な地域で医療的ケア児が安全・安心して生活できるための地域づくりが求められている。本学周辺の城東区・鶴見区・旭区等では、医療的ケア児者の支援者ネットワークも立ち上がっていない状況での本プロジェクトのスタートであり、色々と手探りの状態ではあった。今年度、当事者・支援者の顔の見える関係づくりの第一歩をセミナーを通して実現できた。防災における課題は山積している中、来年度以降も継続して、災害時のハブ拠点となる福祉避難所開設を目指した地域防災力を高めるプロジェクトを企画・運営していきたいと考える。

謝辞

本プロジェクトの趣旨に賛同いただいた城東区保健福祉課、城東区社会福祉協議会、城東区障がい者基幹相談支援センターわくわく、大阪府光陽支援学校、有限会社オールケア旭、放課後等デイサービス・ルナ、株式会社familink、当事者家族2名の皆様、また、セミナーの講師をお引き受けいただいた石塚裕子先生、吉田琴美様、田中美紀様、セミナーに参加くださった地域の支援者様、当事者家族様に深く感謝いたします。

# 「地域での ACP 普及を目指した住民参加の会を開催するための、 地域活動従事者(行政・医療・保健・福祉)との連携と 住民の ACP に関するニーズ把握」活動報告

吉田 智美 秋山 正子

## 1. はじめに

人生の最終段階における医療・ケアに関して、家族と話し合ったことがある人は約 40%、逆に全く話し合ったことがない人は約 50%を占めている。一方、終末期には約 70%の人が意思表示をできなくなる。このような状況において、アドバンス・ケア・プランニング (advance care planning : 以下 ACP) が厚生労働省から推奨されている。ACP とは「意思決定能力をもつ個人がそれぞれの価値観を同定し、重篤な疾患の意味や結果を思案し、将来の治療やケアの目標や意向を明確にし、家族や医療従事者と話し合うことを可能にするもの」である。日本においては、ACP が厚生労働省の取り組みや、診療報酬上の要件となったことも相俟って、行政職や医療従事者の中で急速にその認識が広まってきている。2018 年に厚生労働省が ACP の愛称を公募し「人生会議」と決まった。しかし、その広報(内容)に批判の声が多数挙がり、十分な普及には至らなかった。

今後の多死社会を迎える日本において、地域住民一人ひとりの人生をその人らしく生きていくことを支援するためにも、住民レベルでの ACP に関する情報共有や関連活動の普及を進めていくことは意義があると考え、本事業に取り組んだ。

## 2. 目的

本事業の目的は、以下のとおりである。

本学の所在地である城東区、鶴見区の地域を対象として

- 1) 地域で活動する行政・医療・保健・福祉従事者との連携体制を構築する
- 2) 地域住民の ACP に関する現状とニーズを把握する
- 3) ニーズに基づいて、地域住民が ACP を身近に考えることができる住民参加の会の試案を作成する

## 3. 活動実績

### 1) 城東区における現状

城東区の現状を明らかにするために、当センターを通して 2022 年度第 2 回城東区ネットワーク会議にオブザーバーとして陪席した。人生会議の取り組みは、7~8 年前から行われており、区民向けパンフレ

ットの作成、ACP サポーター研修の予定等、かなり完成した状況で普及が推進されていた。かたや、COVID-19 の感染拡大が収まらず、対面での会合等が難しい状況でもあった。

2021 年度城東区民アンケート調査報告によると、『回復の見込みがない状態となった場合、人生の終末期を過ごしたい場所として、自宅 46%、病院(ホスピス含む) 30%、施設 22%、その他 3%』『人生会議という名前も内容も知っている 4%、名前を知っている程度 10%、知らない 86%』(n=522)であった。

### 2) 鶴見区における現状

鶴見区の現状を明らかにするために、広報誌に記載のあった ACP パンフレットの配布窓口の保健福祉センターへの問い合わせを行った。11 月 30 日開催事業「つるりっぷといっしょに人生会議」に本事業担当者 2 名で参加し、鶴見区在宅医療・介護連携相談支援室コーディネーターをご紹介頂き、12 月 21 日、同氏より、「鶴見区のいまと未来」「ACP」等について、在宅医療・介護連携事業の成果について等の説明を頂いた。

同氏によれば、大阪市全域の地区診断等の現状から、資源の偏在から広域連携の重要性が明らかになったこと、鶴見区に関しては、(1)大阪市の平均値と比して①病病・病診連携の明確な特色がないこと、②区民一人当たりの医療資源が少ないこと、(2)近い未来として、①人口増により、区民一人当たりの医療資源のさらなる減少、②近隣地区の医療資源への依存の加速がある、とのことであった。また、同氏は 2020 年に鶴見区医師会等の関係者に対して、人生会議の普及・啓発も行ったとのことであった。

2021 年度鶴見区民アンケート調査報告によると、『人生会議を内容も含め知っている 2%、聞いたことはあるが知らない 9%、知らない 87%』『今後、人生会議について家族や友人、医療・介護従事者と話し合ってみいたい 32%、話し合うつもりはない 7%、わからない 58%』(n=496)であり、『つもりはない、わからないの理由は、イメージがわからないから 78%、面倒だから 12%、話し合う人がいない 11%』(n=323)であった。

### 3) 大阪市の取り組み

鶴見保健福祉センターの担当者より、ACP への取り組みにおいては、区は、つなぐ役割であり、詳細については、大阪市役所担当保健師からの説明が可能との紹介を頂き、2023年1月24日に大阪市役所担当者先を訪問し、以下の情報を得た。

大阪市では、国からの在宅医療・介護連携推進事業については8つの柱をたて、区役所中心の事業実施が4本、地区医師会等に委託が3本、大阪市健康局を中心に検討1本を各々担当し、相互に連携し推進しているとのことであった。その中心は、地区医師会等への委託部分で、(1)医療・介護の提供体制の構築推進、(2)情報共有の支援、(3)在宅医療・介護連携に関する相談支援であり、その実働を担っている「在宅医療・介護連携支援コーディネーター」の活動の一端として、ACPを基に活動をすすめている地区もあるとのことであった。2月4日に開催され、本事業担当者2名が参加した2022年度大阪市在宅医療・介護連携相談支援室活動報告会では、西ブロック(福島、此花、西、港、大正、西淀川)から「各区のACPの取り組みからみえてきたもの」、北ブロック(北、都島、淀川、東淀川、旭)「ACPをかなえるために」の報告があった。下表のように、地域にあった取り組みが進展していることが分かった。

大阪市	もしものときのために：リーフレット
鶴見	鶴見区版「人生会議の手引き」
西淀川	区内高校生が主演の動画「に～よん劇場」、に～よん参考書、もしバナマイスターの活動
此花区医師会	意思決定支援のためのACPガイドンス、此花区医師会エチケット集～多職種連携・ACP実践のために～
西	万が一の時の治療や介護のチェック表
港	啓発チラシ、ACPノート
福島	VR看取り体験研修会、緩和医療連携会
淀川	夢ちゃんマイノート、もしバナゲーム
東淀川	チームACP、自分の思いを伝えるオレンジノート
都島	「もしもの時に伝えたいこと」ノート、啓発ビデオ
旭	啓蒙動画「一人を抱え込まないで」

#### 4) 大阪府の取り組み

大阪府補助事業である「ACP 支援専門人材育成事業人材育成研修」(大阪府看護協会主催)に吉田教員が参加し、大阪府のACP 推進状況について情報を得た。大阪府では、大阪府看護協会と協働し、「人

生会議」の普及が行える医療施設職員等を対象に昨年度より人材育成研修を行っており、普及に活用可能な資料は、大阪府HPに掲載し、啓発資料の無料配布、アニメ動画公開等がなされていた(大阪市もこの資料を活用)。

#### 5) ELNEC-J (研修参加)

2月11・12日、ELNEC-J (The End-of-Life Nursing Education Consortium - Japan) コアカリキュラムに秋山教員が参加し、コミュニケーション - 患者の意思決定を支えるために - を含む10のモジュールについて、最新の知見を得た。

#### 4. 今後の展望

住民調査の結果から、城東、鶴見の両区ともに、人生会議という名称では、周知が進んでいない現状が見えてきた。一方、医療・介護従事者の周知については、両区で多少異なる現状も見られた。

大阪市内での現状の一端についても情報を得ることができ、本学との連携可能な近隣地区での活動も視野に入れることや、本学が教育施設であることの強みも生かして事業展開の内容も再検討するのがより、現実的かと考える。

以上から、本事業目的の1) 2) については一定の成果が得られたと考える。地域の現状を踏まえ、鶴見区との連携の手がかりをさらに検討することが本事業の推進には必要であると考えられた。

住民がACPを身近に考えることができるためには、事業自体に参加しやすい内容構成とすること、また、本学の強みを生かしつつ、関連機関との確実な連携を図れることが、必須であるとも考える。

目的3) が未達成であるが、対象者住民を明確にしながら、参加者自身が、少ない抵抗感で、自分の人生を考える機会作りから始めていくことが大切かと考える。

#### 5. 謝辞

ご協力くださった鶴見区、城東区、大阪府看護協会、大阪市健康局、鶴見区保健福祉センター、鶴見区在宅医療・介護連携相談支援室の皆様、ご支援・ご協力くださった全ての皆様に深く感謝致します。



# 「前向き子育てプログラム(トリプルP)の実践」活動報告

岡崎 裕子 檜木野 裕美 中野 幸子

## 1. はじめに

今日、子育て、あるいは「親になっていく」「親をする」ためには、子ども虐待のリスク要因を抱える親に限らず、妊娠前、あるいはそれ以前から親になる準備をしながら親になっていく必要がある。本来、子育ては伝統的なつながりや文化を継承していくため、群れの中で学習していくものであり、家族をはじめ、地域社会の中で学習体験として子育ては引き継がれていた。しかし、少子化や核家族化など社会の変化に伴い親を取り巻く環境は厳しくなり、親の育児力の低下が問題となっている。そのため、親が安定して子育てをしていくためには、社会支援の投入が不可欠になっており、子どもの虐待に発展する前に、親の不適切な養育を改善したり、親が「親になっていく」「親にする」ための支援が求められている。

欧米においては、1980 年前後より親の育ちを支援するプログラムが子育てへの教育的介入手段として実践されるようになり、親としての基本的な子育ての知識や技術などを知っておくこと等を目的に、様々なペアレンティングプログラムが開発され、実施されている。「前向き子育てプログラム(トリプル P: Positive Parenting Program)」は、オーストラリアの心理学者マッド・サンダースが開発したペアレンティングプログラムで、世界 25 カ国以上で実施され、ペアレンティングプログラムとして一定の成果を収めている。日本においても、2006 年から多くの自治体等で実施されている。

そこで、地域社会に貢献するため、トリプル P を実施した。

## 2. 前向き子育てプログラム(トリプル P : Positive Parenting Program)の概要

前向き子育てプログラム(トリプル P : Positive Parenting Program)は、参加体験型のプログラムで、子どもの自尊心を育み、子育てを楽しく前向きにしていくようにデザインされている。トリプル P の目的は、親の子育ての知識・技能・自信の向上、安全で、活動的で、暴力や争いの少ない環境を創ること、子どもの社会性・情緒・ことば・知能・行動の力を伸ばすことであり、自己充足感、自己効力感、自己管理、自ら行動する者、問題解決の力を身につけることを重要と考えている。トリプル P の基本原

理は、安全に遊べる環境づくり、積極的に学べる環境づくり、一貫したしつけ、適切な期待感を持つ、親としての自分を大切にすることであり、これらの原理がトリプル P の 17 技術を生み出している。

トリプル P で推奨される 17 の子育ての技術には、子どもの発達を促す 10 の技術と子どもの問題行動に対応する 7 の技術があり、この技術の中から、親自身が自分や子どもに合っていると思う方法や、自分ができそうな方法を選択して子育てプランを作成し、実行できるよう支援する。

トリプル P は、すべての子どもに有効な単一の介入方法があるのではなく、親のニーズを捉えて、親のニーズに合うレベルで支援が提供できるように、レベル 1 からレベル 5 の介入レベルがある。

レベル 1	メディアを通じて、一般的な子どもの難しい行動の発生要因や対処方法などを伝える
レベル 2	セミナー形式で、子どもの発達や特定の行動など子育て一般に役立つ情報を提供する
レベル 3	ある特定の子育ての問題に対して、短期プログラム(4 回)をチップシート、DVD 等を用いて実施する
レベル 4	集中的に子育ての技術を学びたい親に、子育て法の指導、行動問題への対処手法を教示する
レベル 5	困難な複合問題を抱えた家族のためのプログラム

今回は、レベル 3(プライマリケアトリプル P)を実施した。レベル 3 は、2 歳から 12 歳までの子どもをもつ親を対象とし、親が感じている子どもの特定の問題(例えば、かんしゃく等)に対処するための支援であり、トリプル P 認定ファシリテーターと親の 1 対 1 で、1 セッション(15~30 分)を週 1 回、計 4 セッションを実施する。

第 1 回	親が懸念している子どもの問題を特定し、問題行動の記録方法を定める
第 2 回	子どもの問題行動の要因について話し合い、変化への目標を決定し、子育てプランを作成する

第3回	子育てプランの実行を振り返り、必要時、子育てプランを改良する
第4回	子育てプランの実行を振り返り、目標達成率を確認し、変化を維持する方法を話し合う

プログラムの結果の評価のため、参加者にはプログラム開始前に子育ての体験アンケートへの回答、プログラム実施期間中は問題行動の記録をつけていただき、終了後には、子育て体験アンケート、目標達成スケールワークシート、クライアント満足度のアンケートに回答していただく。

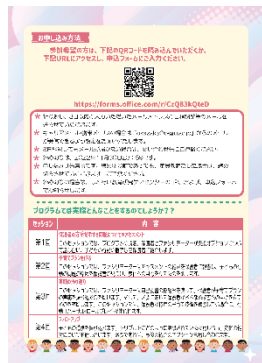


セッションで使用するブックレットとチップシート

### 3. 活動実績

#### 1) 参加者のリクルート

今回は、参加者の募集定員を3名とし、募集チラシを作成し、大阪信愛学院幼稚園で配布していただいた。Microsoft Forms で申込フォームを作成し、チラシ裏のQRコードを読み取って申込フォームにアクセスし、必要事項を記載して登録していただいた。個人情報保護について参加者に説明し、情報の保護に努めた。



募集チラシ

#### 2) プログラムの実施結果

##### (1) 参加者数

参加者は3名で、全員母親であった。就園していない子どもがいる場合は、プログラムを実施している母親の近くで、教員が託児を行った。

##### (2) 実施期間

実施期間は、2022年10月～12月である。

##### (3) 実施場所

しんあい教育研究ケアセンター相談室、幼稚園の親子教室で使用している教室で実施した。



プログラム実施会場の様子



託児の様子

##### (4) プログラム実施結果

母親がプログラムの対象としていた子どもは、全員第1子であった。

母親は、子どもの問題に対してブックレットやチップシートを活用しながら子育てプランを作成した。母親は、プランに基づき子どもに対応し、その時の様子を記録した。母親とファシリテーターが一緒にその記録を見て振り返り、子どもの様子の解釈を示し、次の関わりを考えていくことで、母親が客観的に自分の関わりを考えられるようになった。

プログラム終了時、全員が目標達成に近づいたと評価し、子育て体験アンケートでは、子育てのストレスや困難感の軽減、充実感の増加傾向がみられた。また、クライアント満足度のアンケートでは、特にプログラムの質の評価、満足度、ニーズの適合において点数が高く、「このプログラムに参加したことで解決の糸口が見え、精神的にも支えとなった」「具体的なメソッドを学ぶことができ、非常に有意義で良い経験ができた」「振り返りや話を聞いていただいたことで心が軽くなり、自分自身のストレスが軽減された」と述べていた。

#### 4. 今後の展望

今年度は募集定員が少なく、早期に定員を満たしてしまったこと、プログラム参加のニーズが高いことから、定員を増やしてトリプルPを継続して実施できるよう検討していく。

謝辞

大阪信愛学院幼稚園園長大谷先生はじめ、先生方のご協力を賜りありがとうございました。

## 「子どもの虐待予防にむけた研修会の開催」活動報告

岡崎 裕子 檜木野 裕美 中野 幸子

### 1. 開催目的

小児医療における虐待対応として求められるのは、入院してくる被虐待児・虐待者への対応だけではなく、普段の親子の日常の様子から養育に問題のある親と子どもに対する虐待予防や子どもの健全育成に向けた育児支援である。疾患を抱えた子どもの疾患管理に重点が置かれがちであるが、小児医療に携わる専門職者は、育児支援の視点を持って親子にかかわる必要がある。

そこで、地域の小児医療に携わる専門職者の子ども虐待に対する知識を深め、疾患を抱えた子どもの虐待予防に向けた育児支援を実践するための基礎を養うことを目的に、研修会を開催した。

### 2. 開催方法

#### 1) 研修会概要

##### (1) 開催日時

2022年12月4日(日)13:00~16:00

##### (2) 講師

白山真知子氏 (臨床心理士:認定NPO法人児童虐待防止協会理事、NPO法人トリプルPジャパン理事、フラハ大阪心理発達レジリエンス研究所代表)

##### (3) テーマ

子ども虐待について学ぼう

「イマドキの母親を理解するために」

##### (4) 開催方法

感染予防の観点と、参加のしやすさからZoom ウェビナーを利用したオンライン研修とした。講義資料は、事前に参加者に URL をメールで伝え、ダウンロードしていただいた。Zoom ウェビナーの「Q&A」機能を利用し、参加者からの質問を受け付け、講演の最後に質疑応答の時間を設け、講師から返答し、できるだけ双方向の研修会になるように実施した。

#### 2) 対象

対象は、小児医療に携わる専門職 50 名程度である。

#### 3) 募集方法

研修会の案内チラシを自作した。案内チラシを作成するにあたり、認定NPO法人児童虐待防止全国ネットワークにオレンジリボンの画像の使用について申請し、使用許諾を得た。案内チラシを近畿厚生局

に小児入院医療管理料1~5を届出ている大阪府下の60施設に郵送し、しんあい教育研究ケアセンターのホームページにも研修会の案内を掲載し、参加者を募集した。

Microsoft Forms を使用して申込フォームを作成した。参加者には、案内チラシに掲載したQRコードを読み込むか、URL から申し込みフォームにアクセスし、必要事項を記載して登録していただいた。個人情報保護について参加者に説明し、情報の保護に努めた。



研修会案内チラシ表



研修会案内チラシ裏



研修会申し込みフォーム

### 3. 開催結果

#### 1) 参加者について

38名の参加申し込みがあり、参加者の勤務地は、大阪府だけでなく、東は東京都、西は広島県まで広域にわたっていた。参加者の職種は、看護師、助産師、保育士、社会福祉士、MSW、臨床心理士・公認心理師であり、小児病棟や小児外来だけでなく、NICU・GCUや産科で勤務する人も多いのが特徴であった。

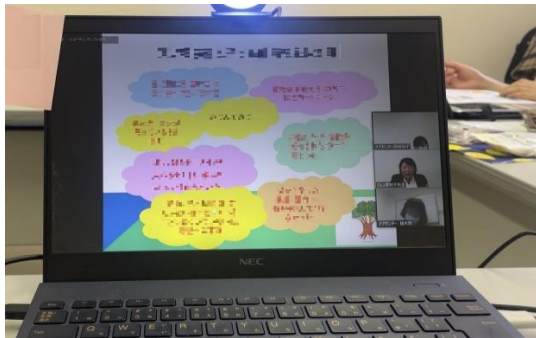
#### 2) 研修会の内容

講師には、Microsoft Powerpoint を用いたプレゼンテーションと資料を用いて、講義を行っていただいた。講義内容は、現代の子育てに関する統計的な動向、子育て事情、子どもの虐待に関する基礎知識、虐待をしてしまっている母親の理解と支援についてであり、多くの事例を踏まえて説明された。

#### 3) 研修会の様子



講義中の様子



講義中の Zoom ウェビナーの様子

#### 4) アンケート結果

Zoom ウェビナーのアンケート機能を使用し、参加者に研修会終了時に自由意思によるアンケートへの回答を求め、25名から回答を得た。

問1：研修会に参加した感想について	n=25 (%)
おおいによかった	9 (36)
よかった	16 (64)
あまりよくなかった	0
よくなかった	0

#### 【研修会の感想(自由記載)】

- 母親の傷ついた経験やしんどさを受け止めることや、ストレングスを見ていくこと等、たくさん視点があることを学び知識が深まった。
- 母親は、医療者には話を聞かれたくないと思っているのではないかと先入観があったが、講演を聴き、話を聞いて欲しいと思っている母親もいるのではないかと、逆に聞かなければならないと思うようになった。子育ての裏にある状況の理解に今後も務めたいと思う。
- 事例があったので、具体的で想像しやすく理解できた。
- 「何か気になる」という視点を大事に、かかわるスタッフと情報共有しながら母親、その家族を見守っていききたいと思う。

問2：今後の子ども虐待や育児支援に関する研修会への参加希望について

	n=25 (%)
参加を希望する	24 (96)
わからない	1 (4)
参加を希望しない	0

#### 4. 研修会の評価および今後の展望

子どもが疾患や障がいをかかえ、医療機関を受診させる親の中には養育に問題を抱える親も多い。親と子どもの近くで、そして多くの時間を関わる看護師に対する子ども虐待予防に期待される役割は大きい。しかし、子ども虐待に関する研修会は数多くあるものの、看護師を対象とした研修会は数が少ない。さらに、新型コロナウイルス感染拡大により研修会に参加する機会は減っており、日々、看護師は手探りで親へ対応し、困難を感じている。

アンケートの回答より、研修会の内容について「おおいによかった」「よかった」と全員が回答し、今後も子ども虐待に関する研修会に「参加したい」と回答した人が多く、研修内容についての満足度は高く、参加者のニーズに合った研修内容となったと考える。

2020年に児童虐待防止法、児童福祉法の改正がなされ、親の体罰禁止等に関わる情報の提供等をしながら、次年度以降も子ども虐待に関する研修会を継続すること、大阪での虐待対応に対する取り組みや関連機関との連携と看護職の役割、家族とのコミュニケーション、被虐待児や虐待する親への対応やケアなど、参加者のニーズに合った研修会を検討したい。

## 「堇地域活動協議会百歳体操活性化プロジェクト」活動報告

長尾 匡子 西村 美八 阪上 由美 秋山 正子

### 1. はじめに

高齢者の健康維持と介護予防を目的とした「いきいき百歳体操」は簡単で安全性が高く、個人の体力に合わせて実施できることから、地域の会館や集会所で住民が中心となって運営していることが多い。住民同士の情報交換や交流、地域づくりの促進や強化も期待できるため、大阪市も積極的に推奨しており、本学周辺の堇・鯉江東地域包括支援センター圏域の4ヶ所の地域活動協議会(堇、関目、関目東、鯉江東)でも開催されていた。しかし堇地域活動協議会での百歳体操は、世話役の交代やCOVID-19による活動自粛により、ここ数年は開催されていなかった。堇地域活動協議会と城東区社会福祉協議会から百歳体操活動を再開に向けての協力依頼を受け、地域貢献と有機的連携を図ることを目的に、2022年6月6日から週1回開催の堇地域(堇憩いの家)での百歳体操への支援・協力をを行うことにした。

### 2. 目的

当初の本事業の目的は、1) 10年以上行われてきた堇地域の百歳体操実施を継続し、地域高齢者の健康増進および介護予防を行う。2) 上記1)の効果を評価する。3) 大阪信愛学院大学の地域社会に対する貢献と有機的連携に努める、であった。具体的には、目的1)は堇地域活動協議会の百歳体操が軌道に乗るよう、支援・協力をを行うこととした。また、百歳体操参加者に継続参加してもらうために、目的2)として、半年後に体操効果が可視化できるよう効果測定会を行う、こととした。堇地域活動協議会の百歳体操活動が軌道に乗るには約半年かかると推測しており、教員は困りごとに対応できるよう、毎開催日に参加していた。しかし、COVID-19の活動制限の緩和により、世話人を中心に参加住民が運営に協力するなど活動が徐々に再開され、約2か月で主体的活動として軌道に乗った。そのため、教員の参加回数を減らし、何か困ったときには大学が支援するという体制を継続しつつ、目的2)に重きをシフトすることとした。まずは、堇地域活動協議会において活動再開半年後に体力測定会を実施することとした。そして、堇地域活動協議会以外の堇・鯉江東地域包括支援センター圏域の百歳体操開催場所である関目、関目東、鯉江東地域活動協議会での効果測定

会を実施することとした。理由は、この3か所はCOVID-19禍でも百歳体操活動を継続開催していたが、その効果を可視化する機会は無かったからである。大学として、百歳体操参加者がその効果を実感して継続参加を促すことは、地域住民の介護予防に貢献でき、目的3)につながると思った。

### 3. 活動実績

#### 1) 百歳体操の効果測定会

##### (1) 堇地域活動協議会測定会

日時：2023年1月30日(月)13時30分～15時  
場所：堇憩いの家

22名の方の測定を実施した。測定項目は身長・体重、血管年齢、握力、5回立ち上がりテスト、2ステップテストである。厚生労働省が提示する「介護予防マニュアル第4版」の「基本チェックリスト」に回答していただき、測定結果と共に今後の生活や運動・体操に向けたコメントを記載した用紙を後日、参加者に返却した。また、百歳体操に参加しての感想や大学への要望についてアンケートを行った。

参加者の平均年齢は76.0歳であった。アンケートで百歳体操参加による効果を問うたところ、40.9%が効果があったと回答し、「歩くのがスムーズになった」「体操をすることにより身体がほぐれる」と感想を寄せていたが、「今の所効果はわからない」という意見もあった。また40.9%が人と交流する機会が増えたと回答し、「楽しみにしています」「口を動かす体操や上半身を使う体操もやってみたい」など、積極的に百歳体操活動に参加していることがわかった。

この測定会運営に際しては、西田頼子教員、郷司律子教員の協力を得た。

##### (2) 関目地域活動協議会測定会

日時：2023年3月8日(水)9時30分～12時  
場所：関目憩いの家

17名の方の測定を実施した。測定項目および参加者への結果の返却は、前述(1)と同様である。

参加者の平均年齢は84.4歳で、こちらも58.8%が百歳体操参加は効果があると回答し、「膝・腰の痛みはなくなった」「歩くのが楽になった」「休むと体力が落ちた感じがする」と感想を寄せていた。また47.1%が外出の機会が増えたと回答し、41.2%



が人と交流する機会が増えたと回答していた。「百歳体操に行く日が楽しみで心身共にリラックス出来て嬉しいです」「楽しく頑張っています」「続けることが大切」との意見が寄せられたが、「人数が減ってきたのは淋しいです」との意見もあった。

この測定会運営に際しては、西山史江教員、井内伸栄教員、山本祐子教員の協力を得た。



## 2) 大学への要望（アンケート結果より）

2会場でのアンケートを集計した結果では、大学が測定会を実施することについて、葦地域と関目地域全体の94.9%が「あった方がよい」と回答していた。また開催頻度については、「半年に1回」が46.2%と最多で、28.2%が「3か月に1回」と回答していた。

百歳体操以外で大学に要望することとして、「ストレッチ体操等もっと教えて欲しい」「高齢になり体力が衰えると悔しい。有効な身体の動かし方が教えてほしい」などがあつた。

百歳体操参加への効果は、主観的に実感していても、数値評価することで百歳体操への継続参加や日常生活を見直す機会となる。参加者からも年に1～2回は体力測定会を開催して欲しいとの要望があることから、大学が体力測定会を定期的実施する意義は大きいと考える。

## 4. 今後の展望

葦・鯉江東地域包括支援センター圏域4ヶ所の地域活動協議会(葦、関目、関目東、鯉江東)での百歳体操効果測定会実施へと活動の場を広げたが、大学業務との兼ね合いで今年度は葦、関目地域活動協議会、2か所のみの実施となった。継続した測定会実施の要望があり、定期的な実施を検討している。また、次年度に関目東、鯉江東地域活動協議会で初回の効果測定会を実施する予定である。この2か所で

も定期的な実施への要望が高いと推測するため、4か所での定期的な効果測定会を実施していきたいと考える。

また、百歳体操は住民主体の活動であるため、その自主性を尊重し、住民からの要望があつた際には協力、支援する体制を今後も継続していく。

## 謝辞

大学が百歳体操に関わることに理解を示してくださつた葦・鯉江東地域包括支援センター圏域4ヶ所の地域活動協議会(葦、関目、関目東、鯉江東)・城東区社会福祉協議会の皆様、百歳体操に参加されている地域住民の皆様に深く感謝いたします。

大阪信愛学院大学 しんあい教育研究ケアセンター

# 百歳体操 効果測定会

**日時** 令和5(2023)年1月30日(月)  
①13時30分～(5名)、②13時45分～(5名)、③体操終了後  
(ご希望の時間帯の整理券を世話人様から受け取ってください)

**場所** 董憩の家 古市3-1-48

**申込方法** 百歳体操の世話人様に直接お申し込みください。整理券をお渡します。

**内容** アンケート記入、血圧、血管年齢、身長、体重、握力、5回立ち上がりテスト、2ステップテスト(2歩分の歩幅を測定)

担当者：大阪信愛学院大学看護学部教員(看護師・保健師)  
主催：しんあい教育研究ケアセンター 葦地域100歳体操活性化プロジェクト  
共催：葦地域活動協議会事務局(董憩の家)

**【お問い合わせ】**  
大阪信愛学院大学 看護学部 長尾  
電話：06-6939-4391(代表) (平日9時～17時)

# 「幼児期の『縄跳び遊び』における段階的学習に関する一考察」

## 活動報告

大森 宏一

### 1. はじめに（背景と目的）

子どもの体力低下が加速する一方、遊び場の不足、遊び相手の少なさ、遊び時間の確保が困難になっていることは言うまでもない。学院内において、特に幼稚園の子どもを対象に、縄跳び遊びを主にした様々な遊びを通して運動遊びの機会を増やし運動遊びが好きな子どもを増やしたいと考えている。そこで、設定保育の中で指導的に運動あそびを行わせると体力増進が望めないことから、自由遊びの中で様々な運動遊びを経験しつつ、縄跳びが好きになり、連続して跳べるようになることを目的とした。

今回取り上げる、縄跳び運動は、上肢と下肢の協応運動となるが、ジャンプ運動は上肢を下から上へ引き上げられることによって跳躍が助成される。しかし短縄跳びでは、上から下へと動かす際にジャンプ運動となるためきわめて協調しにくい運動である。また、腕の動きについても手首で縄を回すためには無駄な力を抜いて動かすことや、等速運動ではなく、加速される動きとゆっくりの動きの調整も必要となる。

短縄運動を楽しむためには、多くの動きを統合し調整する必要があるため様々な遊びを楽しみながら、一定期間継続して行う必要がある。特に、この遊びによって縄跳びが嫌いになることのないように配慮が必要である。そのため、子どもが楽しみながら遊びが進められるような環境を設定できるように検討して遊びを進めた。

今年度は幼稚園降園時に保護者と一緒に楽しむことで保護者と子どもの関係、保護者同士の関係、他クラスとの子どもの関係をたいせつに見守りつつ、地域貢献活動としての活動を行った。

### 2. 活動実績

対象者：大阪信愛学院幼稚園園児と保護者

期間：2022年10月末から2023年3月末

毎週火曜日と木曜日の午後14時頃から15時頃まで

参加形態：降園時の保護者同伴での参加を基本とした

内容：スラックライン遊び、ミニトランポリン遊び、トレーニングラダー遊び、ゴム飛び遊び、長縄あそび、短縄遊び、コマ遊びなど

参加実績として：

登録親子参加人数

年長児：26名（女児14名 男児12名）

年中児：30名（女児18名 男児12名）

年少児：16名（女児9名 男児7名）

未満児：2名（男児2名）

合計74名（女児41名 男児33名）

のべ参加者人数：259名（2023年3月9日）

毎回約15組～20組程度の参加があり、幼稚園児のみならず、弟妹も一緒に参加する姿が見られた。毎回欠かさず参加される親子もいた。活動を楽しみにしてくれる様子もあり降園時の活動として定着化している。

縄跳びができるようになることを目的にして活動は行っているが、「遊びである」ことを重視して極力、運動方法の指導などはしていない。回を重ねるにつれて、自然に縄跳びができるようになる子どもが増えてきており、保護者と共に喜びの声が聞かれた。

また、コマ遊びの環境設定もしているが、保護者ができるようになると子どもが興味を持ち回せるようになる姿が見受けられた。コマ回し遊びは、紐をコマに巻き付ける微細な手指の運動と、体全体を使ってコマを回すダイナミックな運動が合わさった動きがある。年少・年中の子どもにとっては、コマに紐をまく動作は、保護者の支援が欠かせない。このことから保護者と一緒に運動遊びを共有できる活動としても意義があったように思われる。コマ回しの遊びが、縄跳びの運動にどの程度寄与しているかは不明であるが、紐巻き動作と投げる動きは、縄跳び時の手首や腕の回旋動作に少なからず関係があると考えている。

スラックラインの遊びは、今回の活動で一番人気のある遊びである。（スラックラインとは、幅約5センチのロープ上をバランスを取りながら歩く遊び）

今回参加した多くの子どもにとって初めて遊ぶ環境であり、ゆらゆら揺れるライン上は、ドキドキ感

がありながらも危険度が少ない遊びであることから子どもが遊びながらバランス感覚や体幹を養う活動として適していると考えられる。発達している器官は好んで何度も遊びたがるということがよくわかる活動であった。子どもたちは、ラインの上で自ら体を上下に揺らし浮遊感覚を楽しんでいるようであった。縄跳びのジャンプの際の体のバランス感覚、体幹と脚力においても刺激があり縄遊びに多いに貢献できた遊びであると思われる。



長縄は片方を固定して設定しておいたが、保護者と一緒に遊んでいる姿が毎回見られた。最初は、その場で連続して跳べなかった子どもが、10回20回と連続して跳べるようになる姿がほほえましく感じられる活動であった。年少児の親子では、大波小波や蛇をイメージした縄の動きに感化されて楽しくジャンプする様子が印象的である。また、自分の子ども以外であっても縄を回している姿も見られたことは、社会全体で子どもを育てることにつながる活動であったと思われる。

ゴム飛び遊びでは、椅子2台をゴムでつないでの遊びであったが、2本飛び越える遊びが多く見受けられた。このことも縄跳びに関与した遊びであると思われる。



数種類の遊びではあったが、主体性を基本とした遊びの環境設定と保護者と一緒に遊ぶ空間が、子どもの体と心にプラスの影響を与えられたように感じる。15時には終了するが、まだ遊び足りないと訴える姿も見受けられた。遊びの三間（空間時間仲間）

が減りつつある現代においては、幼児期に保護者の見守りの中で行う活動が子どもの成長に貢献できることを感じた活動であった。



### 3. 課題と今後の展望

今年度は、10月ごろから本格的に活動を始めたが、本学幼稚園は、バス通園の子どもも多くこの活動に参加できない親子もいた。また、この活動のためにわざわざ自家用車で迎えに来ている親子もあり、今後は活動参加できる母数を増やすことができるような取り組みを検討したい。

大学の時間割の関係もあるが、学生ボランティアを推進することで、大学生と幼稚園児とのかかわりを増やし、幼稚園から大学までである本学院の良さを多くの人にアピールできるのではないかとと思われる。

保護者同伴での参加ということで、保護者同士のつながりも期待できる活動であることから、保護者支援の観点からもアプローチできる活動も検討したい。

### 謝辞

この活動に参加してくださった園児と保護者の皆様に深く感謝いたします。大きな怪我や事故がなく活動できたのは協力的な保護者の方々の見守りがあってのことと思います。ありがとうございました。

また、場所を提供してくださった信愛幼稚園の園長先生並びに関係の先生方、ご支援ご協力をしてくださったすべての皆様に深く感謝いたします。

## 「思春期セミナー」活動報告

齊藤 誠一(大阪信愛学院大学・教育学部) 北島 倫明(夢未来高等学院大阪信愛校)

### 1. はじめに

思春期は、10歳頃から15歳頃に発現する急激な形態発育と生殖性の獲得となる性的成熟を特徴として、当の子どもたちには多様な心理的影響を与えられている。また、この時期は認知発達の上でも形式的操作期に移行し、抽象的思考が可能となり、保護者や教師など大人の発言や指示に対しても疑問を持ったり、指示をきかなかったりするなど第2反抗期と呼ばれる言動を示すようになる。

保護者や教師は自らも経験してきたものの、こうした子どもたちの変化を適切に理解し、対応することに困難さを感じることが多い。他方、それまでのような近い会話や一緒の行う行動も減り、親子関係が希薄になると言われている。

また、この時期は不登校も増加し、中学校では長期間欠席が続いたり、高校では中退し、通信制高校などへ転校したりする子どもたちも少なくない。

さらには、発達障害を有する子どもたちは主に学校での人間関係に問題を抱えたり、他の同級生などと異なる自分に気づき、二次的に自己肯定感が低下したりすることも多く、社会的適応に苦しむこともある。

このように思春期の子どもたちは多様な姿を示すことになり、保護者や教師はかれらを理解し、適切な関わりをもつことに困難さを持ち、対応に苦慮することが多いのが現実である。

本セミナーでは、とりわけ保護者が思春期の子どもを理解し、親としてどのように関わっていけばよいかを学び、実践できることをめざしていく。

### 2. 目的

思春期の子どもをもつ保護者に対して、身体的、心理的に急激な変化を伴う思春期の子をどのように理解し、どのように関係性をもてばいいのかについて、臨床心理学、発達心理学、発達障害学の観点から講義し、思春期の子育てに対する不安を低減させることを目的とする。

### 3. 活動実績

#### ●第1回

日時：6月28日(火) 13:30~15:00

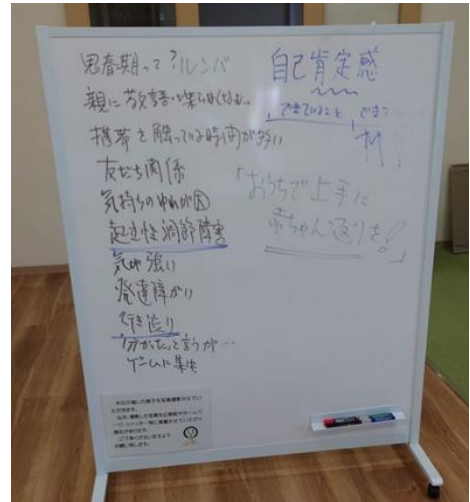
講師：木南 千枝(臨床心理士/大阪信愛学院

スクールカウンセラー)

テーマ：臨床心理士から見た思春期

概要：講師から、臨床心理士としての長年のカウンセリン経験をもとに、思春期の子どもの心理的特徴が具体的に説明され、彼らとの向き合い方についていくつかの提案がなされた。質疑応答では参加者自身の個別的な困りごとについての質問が多く出され、講師より具体的な回答があった。

参加者：9名



#### ●第2回

日時：11月22日(火) 15:00~16:30

講師：齊藤 誠一(本学教授)

テーマ：思春期の子ども理解と関わり方

概要：講師より、発達心理学の観点から思春期の子どもの特質、思春期の子どもから見た父母世代、祖父母世代との相互の人間関連などについて説明があった。参加者からゲームばかり

#### (1)体に起きてきていること

##### ●思春期の身体発育

大人の体とのつきあいの始まり/性差/個人差

##### ①急激に体つきが大きくなる

身長が急に伸びる(思春期スパート)

→親と背と同じになる/背を越える

##### ②性的に大人になる

具体的に生殖可能な体になる

→2次性徴

性的成熟

初経→生理(性サイクル)との40年のつきあいの開始

精通→自分でコントロールしにくい性的欲求との

つきあいの開始

している子どもにどう対応すべきかなどについて質問がなされ、講師よりこどもの心になって理解してみるなどが回答された。

参加者：7名

●第3回

日時：12月9日（金）15:00～16:30

講師：山根 隆宏（神戸大学大学院人間発達環境学  
研究科准教授）

テーマ：思春期の発達障害

概要：講師より、発達障害全般の基礎から思春期の発達障害の特徴と対応、将来へ向けての考え方について説明があった。参加者からは、発達障害の子に対して今何をすべきかなどの質問があり、具体的な対応先が提示された。

参加者：17名



り、不登校に至る心理的メカニズムや対応方法について、北島校長より夢未来高校学院での様子が説明された。その後、参加者からの質疑応答と意見交流があった。

参加者：5名



●参加者からの感想

- ・普段、心配したり、悩んだりしていたことが、先生の話聞いて励みになった。他の保護者の方の話も参考になり安心しました。また参加したい。（第1回）
- ・「甘やかし」と、「甘えを満たす」の違いを理解できた。（第1回）
- ・思春期の子どものもことで自分自身が悩んでいることも、それで当たり前のことだとわかった。（第2回）
- ・思春期はかつて自分も通ってきた時代であったことを今さらながら思い出せた（第2回）
- ・地域にLD対応の学習塾があまりないことも問題だと改めて感じた。（第3回）
- ・とても解りやすい話でした。これからの子どもの対応の参考になりました。（第3回）
- ・いま不登校であることで将来への道がないわけではなく、いくつかの選択肢があることがわかった。（第4回）

4. 今後の展望

本年度は、近隣小中学校に案内をしたが、全保護者に周知することがむずかしく、必ずしも多くの参加者を得ることができなかった。ただ、リピーターの参加者もあり、まず一度参加してもらうことが重要であることが確認できた。次年度は、本年度の内容を踏襲しながらも、思春期の子をもつ保護者が気軽に参加し、セミナーを受けるだけでなく、参加者同士が意見交流できる場も作っていききたい。あわせて、具体的な問題を抱える保護者に対しては適切な相談機関の紹介も行いたい。

まとめ

45

- 思春期の問題に子どもの成長や発達の視点をもって理解すること
- 自尊心の低下を防ぐこと（二次障害の予防）
- 肯定的な自己理解と自分なりの対処方法の習得を支えていくこと
- 複数の依存先をもっておくこと（本人も親も）
- 将来を見据えた支援を長く続けていくこと（ただし、何を目標とするかは人それぞれ）

●第4回

日時：1月10日（火）15:00～16:30

講師：齊藤 誠一（本学教授）

北島 倫明（夢未来高等学院大阪信愛校校長）

テーマ：思春期の不登校をめぐって

概要：齊藤講師より思春期に当たる小学校高学年から中学生の不登校の特徴について説明があ

## チャペルコンサート活動報告

足高 壱夫

### 1. はじめに

チャペルコンサートは本学院聖堂を会場としてきたが、新型コロナウイルス感染症禍の昨今では、感染拡大防止の観点から、会場を学院ホールに移し、実施している。

### 2. 目的

- 1) 音楽を通じての地域社会への貢献（城東区役所との連携協力に関する協定書、第2条〔協定事項〕第1項「生涯学習、地域の文化の振興に関すること」の具現化）のため。
- 2) 地域の人たちに大阪信愛学院に親しみをもってもらい、よりよい関係づくりのため。
- 3) 地域の人たちに本学の教育活動の一端に触れてもらうため。

### 3. 活動実績

#### (1) 「第41回チャペルコンサート 音楽の祭日\*1 in 城東区2022」

日時：6月26日（日）14時～15時30分

会場：大阪信愛学院 学院ホール

出演者：ピアノ・奥田昌代、作曲・ピアノ・金井秋彦、ソプラノ・楠本未来、メゾソプラノ・田中由衣、クラリネット・井谷一美

来場者：200人

※1 『音楽の祭日』は、「音楽はすべての人のもの」を基本理念とし、世代・性別・民族を超えたすべての人々が参加できるイベントとして、1982年にフランスでスタートし、今ではその理念に賛同する120カ国以上において実施されるイベントで、2022年は6月18日～26日にかけて日本各地でコンサートが企画実施された。城東区における『音楽の祭日』のイベントは今年15回目を迎え、本チャペルコンサートはこのイベントの一つとして実施。

コンサート当日は真夏のような良い天気恵まれ、開場2時間前から来場者が来られはじめ、定員の150人は開場時には超えた。感染対策に則った最大限まで入場いただくことにしたものの、約200人が限界だった。「会場の外でもいいですから入れませんか」とまで言ってくる方もおられたが、すでに会場入口付近にも椅子を設置しお座りいただい

ているような状態のため、開演前には入場をお断りする事態となった。20～30人ぐらいのお客様にはたいへん申し訳ないことをしてしまった。

- ①花（二重奏）/滝廉太郎
- ②即興曲 op. 90-3/F. シューベルト
- ③革命のエチュード/F. ショパン
- ④花の二重奏/L. ドリーブ
- ⑤白銀の月/A. ドヴォルザーク
- ⑥亜麻色の髪の乙女/C. ドビュッシー
- ⑦カンツォネッタ/C. ピエルネ
- ⑧金井秋彦作品発表

#### \*ピアノ連弾

不思議などびら

夕暮れ

チャチャチャのステップで

#### \*歌曲

たったひとつの（詩・柿本香苗）

文字がことばに（詩・柿本香苗）

石仏一晩秋（詩・吉野 弘）

#### ⑨いのちの歌/村松崇継

#### ⑩花は咲く/詞 岩井俊二・曲 菅野よう子

#### (2) 「第42回チャペルコンサート」

日時：3月5日（日）14時～15時30分

会場：大阪信愛学院ホール

出演者：本学短期大学合唱部・同卒業生、大阪信愛学院大学大学生、エレクトーン・森松慶子、ピアノ・金井秋彦、ソプラノ・楠本未来（合唱部顧問）

来場者：96人

毎年、この時期、大阪信愛学院短期大学合唱部員と楠本未来（ソプラノ）による定期演奏会として実施している。この2年間は、新型コロナウイルス感染拡大により中止となっていた。

- ①学院歌/市川都志春
- ②友だち/平田あゆみ
- ③にじ/中川ひろたか
- ④野ばら/F. シューベルト
- ⑤すみれ/W. A. モーツァルト
- ⑥ねむの木の子/山本正美

- ⑦天使にラブソング  
/ヘイル・ホーリー・クイーン
- ⑧Stand alone/久石譲
- ⑨私のお父さま/G. プッチーニ
- ⑩キーウの大門/M. ムソルグスキー
- ⑪ぜんぶ/相澤直人
- ⑫群青/小田美樹
- ⑬いのちの歌/村松崇継

(3) アンケート結果による活動紹介

1) アンケート集計結果

※回答者数：第41回 n=97、第42回 n=43

①参加者の性別		男	女				
第41回		23.7	76.3				
第42回		20.9	79.1				

②参加者の年代								
	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
第41回	3.1	2.1	6.2	6.2	9.3	22.7	49.5	1.0
第42回	7.0	9.3	2.3	25.6	9.3	18.6	25.6	2.3

③居住地							
	城東区	旭区	鶴見区	大阪市内※ 1	大阪府内※ 2	その他	無回答
第41回	68.0	2.1	8.2	9.3	11.3	0.0	1.0
第42回	37.2	2.3	9.3	30.2	14.0	7.0	0.0

※1 城東・旭・鶴見区除く ※2 大阪市内を除く

④情報源							
	チラシ	区の広報紙	区のHP	友人・知人	本学のHP	その他	無回答
第41回	24.7	46.4	2.1	14.4	3.1	9.3	0.0
第42回	34.9	7.0	—	37.2	2.3	18.6	0.0

その他は、学院・町会の掲示版

④-1チラシの入手先						
	本学	区役所	図書館	その他	無回答	
第41回	29.2	37.5	4.2	25.0	4.2	n=24
第42回	73.3	20.0	0.0	6.7	0.0	n=15

その他は、出演者、町会

⑤会場の立地						
	便利	少し便利	やや不便	不便	どちらでもない	無回答
第41回	64.9	12.4	10.3	3.1	7.2	2.1
第42回	58.1	23.3	2.3	4.7	9.3	2.3

⑥開催日							
	満足	少し満足	やや不満	不満	どちらでもない	その他	無回答
第41回	76.3	11.3	2.1	0.0	5.2	1.0	4.1
第42回	86.0	9.3	0.0	0.0	4.7	0.0	0.0

⑦コンサートの満足度							
	満足	少し満足	ふつう	やや不満	不満	その他	無回答
第41回	73.2	14.4	4.1	0.0	0.0	0.0	8.2
第42回	83.7	4.7	2.3	0.0	0.0	0.0	9.3

⑧参加回数						
	初めて	2回目	3回目	4回目	5回以上	無回答
第41回	56.7	14.4	13.4	4.1	10.3	1.0
第42回	51.2	23.3	7.0	7.0	11.6	0.0

⑨交流の場（城東区市民協働課の依頼項目）					
	大いに感じる	感じる	どちらともいえない	全く感じない	無回答
第41回	21.6	48.5	24.7	3.1	2.1
第42回	—	—	—	—	—

2) 自由記述の一部を紹介

**第41回** こんなによいもののだとは思いませんでした。次回もぜひ参加したいです。▼とてもきれいな曲で感動した。関目地区は音楽の祭典など、6月に、コロナ前はあちこちで演奏を聞きに行ったりできていたので、本当に、久々に聞けてよかった。カラヤンのCDを家でよく聞いているのだが、すてきな生演奏がきけてうれしかった。どうぞこれからも毎年聞かしていただくとありがたい。一曲一曲説明もすごくよかったです。▼毎回のこのコンサートに参加しています。音楽の素晴らしさを感じ、明日の元気のみなもとをいただいています。選曲も素晴らしかった。今回ショパンの「革命のエチュード」を久しぶりに聞きました。ウクライナの現状を心強く感じました。ウクライナに栄光あれ。城東区民として信愛学院が存在することは誇りです。今後もコンサートが長く続くことを願っています。▼「夕暮れ」がステキなメロディーで、今日一番よかったです。心に響きました。「たったひとつの」途中のハプニング、女性スタッフ、ナイスアシストでした。「いのちの歌」も心にしみました。アンコール、涙が出ました。

**第42回** いつも楽しみに聞いているコンサートです。久しぶりとは思えないほど親しみ深く感じました。学生も大変訓練され、きれいな声と楽しいリズムで歌ってくれました。自分には歌えない音域を軽々と澄んで無理のない声で歌って下さり、心が洗われる思いでした。ステキなステキな歌声をありがとう！！▼初めて参加して以来、近くでこんな素晴らしいピアノと歌をきかせていただき大感動して毎年来ています。春になると気をつけてチラシ等をみえています。▼エレクトーンのオーケストレーションが素晴らしかったです。キーウの大門、ベースにフットペダルを使用するだけでなく、パーカッションとシンクロしていてビックリしました。▼楠本先生をはじめとして、合唱部の皆さんのこんなに素敵な歌声を子どもと一緒に聴く機会をつくって下さったこと、ありがたく思います。笑顔で皆さんが歌われている姿に元気をもらえました。音楽っていいあと改めて感じる事ができた一日になりました。またぜひ開催していただけたら嬉しいです。ありがとうございました。キーウの大門、感動しました。

4. 今後の展望

アンケート結果からわかるように、本コンサートへの地域の方たちの期待は大きい。継続して実施することが望まれるが、そのためには実施体制の整備（コンサートの位置づけ・お金・人・組織）が必要である。参加申込方法の検討も必要である。

# 大阪市城東区、鶴見区および近隣地域における外国人生活者の実態と 支援ニーズに関わる基礎調査

齊藤 誠一

## 1. はじめに

現状では、本センターの一部門である国際交流については、地域連携の中で具体的、計画的に事業が展開されていない。しかしながら、本学近隣地域に居住する外国人は少なくなく、何らかの形でつながりを持つことは重要であるといえる。この点から、まず本年度は大阪府、大阪市などの公開データと探索的調査により、実態とニーズの把握を行い、事業展開のための手掛かりを得ることとする。

## 2. 目的

大阪市城東区、鶴見区および近隣地域における外国人生活者の実態と支援ニーズを明らかにすることを目的とする。

## 3. 活動実績

### ●公的データの収集

#### (1)城東区及び周辺3区の人口構成

住民基本台帳に基づく大阪市の外国人口は、145,720人（男70,696人／女75,024人）であり、城東区及び周辺3区の人口は表1に示すように、城東区5,166人、都島区3,487人、旭区2,375人、鶴見区2,107人、合計13,135人となり、全市の約9%となる。城東区及び周辺3区では、城東区が最も多く、生活の中で交流する機会が多いと思われる。

#### (2)大阪市の外国人住民の意識

令和4年度大阪市外国人住民アンケート調査の結果に基づき、本事業の基本的なデータとなる以下の2点を検討する。

## ②生活上の困りごとや知りたい情報（表2）

20%以上の外国人が、生活支援、給付金、税金、健康保険や年金、健康や事故時の対応に関する情報を求めており、まずは日々の生活をしていく上での情報が必要であることがわかる。

表2 生活で分からなくて困っていることや知りたい情報（%）

新型コロナの支援や給付金のこと	32.8
給付金・生活保護	27.7
税金	24.1
国民健康保険や年金	22.8
病気や事故のときにどうすればよいか	20.8
困っていることや知りたいことはない	19.3
火事や地震や台風がおこったときにどうすればよいか	17.0
日本語の勉強のこと	17.0
日本人と交流したい	16.8
病院で診察を受ける方法	14.5
新型コロナのワクチン接種のこと	14.0
予防接種や健康診断	13.5
地域のイベントの情報	13.0
住む家のこと	12.5
ボランティアや市民団体について	12.5
趣味やスポーツなどのサークルの情報	12.2
仕事を探す方法	11.7
仕事で困ったこと（給料や働く時間など）の相談	11.7
新型コロナの検査を受ける方法	11.4
新型コロナの感染状況のこと	10.4
ごみの出し方など生活の規則	8.6
学校で困ったことがあったときの相談	8.3
子どもを産むこと・育てること	8.1
保育園など小さい子どもを預かる場所・学校の入学のこと	7.8
介護や福祉	7.3
スーパーマーケットや薬局の場所などの近所の情報	5.0
DVについての相談	3.0

表1 城東区及び周辺3区の人口構成(令和2年3月末日現在)

区名	男女別	0～9歳	10～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～51歳	60～69歳	70～79歳	80～89歳	90歳以上	総数	合計
都島区	男	92	116	500	423	204	141	135	102	26	2	1741	3487
	女	77	91	437	363	219	212	163	113	47	9	1746	
旭区	男	54	44	370	217	136	111	115	57	37	5	1187	2375
	女	40	49	297	216	137	143	128	62	71	15	1188	
城東区	男	116	105	637	505	328	278	245	125	60	9	2474	5166
	女	124	117	533	514	355	344	295	163	147	33	2692	
鶴見区	男	68	43	179	238	156	108	103	47	37	2	1024	2107
	女	50	33	123	200	160	157	153	65	81	13	1083	



②多文化共生を進める上での重要性

日本人と多文化共生していく上での重要なこととして、表3に示すように、外国人が何でも相談できる窓口、役所窓口での通訳者や通訳機、やさしい日本語での対応などコミュニケーションを取れるような道具的整備の重要性を指摘する一方で、役所職員の外国人理解、日本人の多文化共理解、学校での多文化理解教育などを通じて背景としての情緒的整備の促進が重要であるとしている。つまり、外国人が日本で生活する上でのハードルを下げることで、日本人自身が多文化を理解し、それと共生していくことを求めているといえる。

●探索的調査

(1) 質問紙調査

<手続き>本センター事業である「近隣の幼稚園、小学校、中学校等に対するスクールサポートサポート事業」と共同で、城東区、鶴見区、旭区、都島区、守口市、門真市の公立小中学校を対象に質問紙調査を2023年1月に郵送法で実施した（小学校75校、中学校33校）。

<外国人児童生徒の在籍状況>

11校に外国人が44名在籍しており、中国出身の児童生徒が最も多く、他も東南アジア諸国の出身であった。学校での使用言語では日本語が多く、通常の学校生活は日本語でなされているものと思われるが、児童生徒の生育環境等により日本語を使用できる程度には差があるものと推測される。この中で、1校のみ出身国の言語も用いられており、こうした言語教育を受けていない教員には負担が大きく、当該児童生徒とのコミュニケーションが十分になされているかはむずかしいものと思われる。

(2) 訪問調査

<手続き>

調査月日：2023年3月

調査校：守口市立の小学校

<外国人児童をめぐるとの問題>

周辺の工場などの勤める外国人家族の児童が在籍しており、一定時間は母国語対応の講師派遣もあるが、授業などでの必要な個別支援の時間が十分に取れない。現状では、必ずしも当該母国語を話せない

表3 多文化共生を進める上での重要性

	重要である	重要でない	DK. NA
外国人が何でも相談することができる窓口を作る	85.4	3.3	11.2
役所の窓口に通訳者や通訳機を置く	75.5	12.3	12.2
やさしい日本語のパンフレットを多くして、役所で働く人は、やさしい日本語を話す	72.1	13.9	14
役所の建物で外国語の表示を増やす	62.4	22.5	15.2
役所で働いている人が外国人についてよく理解する	74.2	13.1	12.7
役所のホームページをわかりやすくする	66.7	16.7	16.7
外国語の案内を多くする	64.6	20.9	14.5
日本人が多文化共生を理解する	72.8	12.4	14.8
子どもたちが国籍や文化の違いを理解できるような教育を学校で行う	75.6	9.9	14.5
母国の言葉や文化に触れる機会や場所を増やす	54.7	29	16.4
外国人の意見を役所の仕事に活用するためのシステムを作る	63.6	20	16.6
外国人の役所の委員を多くする	50.5	30.3	19.2
役所で働く外国人を多くする	55.6	27.2	17.2
多文化共生を進めるためのまきりを役所でつくる	63.2	19.2	17.7

表4 外国人児童生徒の在籍状況

人数	出身国の内訳	使用言語
5	中国3・韓国2	日本語
2	中国1・韓国1	日本語
7	中国3・フィリピン3・カナダ1	日本語
7	ベトナム4・中国2・台湾1	日本語
3	未回答	未回答
3	中国3	日本語・中国語
3	ベトナム1・中国1・ネパール1	日本語
2	中国2	日本語
2	ウズベキスタン2	日本語
8	中国2・インドネシア2・フィリピン3・ベトナム1	日本語・中国語・ベトナム語・タガログ語・インドネシア語
2	未回答	未回答

者も含めて、近隣大学の学生ボランティアで対応しているが、カバーできる時間数が少ない。また、保護者とのやりとりをスムーズにする上でも外部支援が望まれる。

(3) 両調査からわかること

潜在的には、個々の学校が有する課題は多く、多様な支援を求めていると思われるので、学校が支援を要請しやすい体制を作るとともに、教員自身も教育実践の場にアウトリーチしていけるフットワークが必要であると言える。また、学生のボランティア要請も多いので、これと合わせて連携が求められていると言える。

4. 今後の課題

本年度の調査事業により、城東区及び周辺地域に一定の外国人が居住し、公立小中学校にも外国人児童生徒が在籍していることが明らかになった。日常生活上の支援、外国人児童生徒に対する個別支援などが求められており、本センター事業としては、本学のリソースを活用することにより、小中学校へのボランティア派遣、教員支援などが想定できる。

## 「門真市立図書館 読み聞かせボランティア」活動報告

谷原 舞

### 1. はじめに

2001年に子どもの読書活動の推進に関する法律が策定され、家庭、学校、そして地域において、取組が進められている。2018年に閣議決定された「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画（第四次）」では、地域の図書館における子どもや保護者を対象とした取組の企画・実施として、「読み聞かせ会」があげられている。子どもの読書離れが進みつつある今、乳幼児期から本に親しむ体験をするため、地域では子ども、そして親を対象に、絵本の読み聞かせをする機会が求められているのである。

そこで本事業では、本学教育学部1年生、短期大学子ども教育学科2年生が読み聞かせボランティアとして、門真市民の親子を対象におはなし会を実施することとした。

### 2. 目的

本事業の目的は、次の通りである。

- 1) 親子で絵本を楽しんでもらうことを通して、門真市の読書活動推進に貢献すること。
- 2) 学生が読み聞かせ体験を積み、絵本を通した親子のふれあいを体感することで、教職・保育職における資質向上を促すこと。

### 3. 活動実績

#### 1) 事前準備

##### (1) 学生によるプログラム作成

2022年10月頃から学生と教員が集まり、おはなし会当日読む絵本について検討した。

選書の視点として、3月中旬という季節を考慮し、春をテーマにプログラムを立てた（表1）。

明るい歌遊びではじまり、参加型絵本、ピクニック（おべんとう）のお話へと繋ぎ、たくさん食べた後は成長のお話で結んだ。なるべく低年齢に合わせた絵本を選択した。間に手遊びや、紙芝居、しかけ絵本等を入れることにより、親子が楽しくおはなしの世界に浸ることができる雰囲気づくりを心掛ける。

##### (2) 門真市立図書館と打ち合わせ

2022年12月15日（木）に、本学学生と教員と門真市立図書館の職員の方と打ち合わせを行った。春

をテーマにしたプログラムを提示し、当日読む絵本が図書館の蔵書であるか確認を行った。

##### (3) チラシの作成・告知

おはなし会のチラシを作成し、門真市立図書館ホームページ、本学ホームページのほか、大阪日日新聞へ掲載、併設の保育園、幼稚園、小学校にチラシを配布し、告知を行った。

表1 当日プログラム

種類	タイトル	作者・作画等
歌遊び	しあわせなら手を叩こう	-
手遊び	おはなしおはなし	-
大型紙芝居	「みんなでぼん！」	まついのりこ／童心社
大型絵本	「いただきバス」	藤本ともひこ／鈴木出版
しかけ絵本	「おべんとうなあに？」	山脇 恭／末崎茂樹／偕成社
手遊び	おべんとうばこ	-
大型絵本	「はらぺこあおむし」	エリック・カール／もり ひさし／出版社

#### 2) 活動実績

##### (1) 大阪信愛学院幼稚園での実践

日時：2023年3月8日（水）15時～15時30分

場所：大阪信愛学院大学 301教室

参加者：大阪信愛学院幼稚園 園児30名程度

当日の様子：数回にわたり学内で練習をした後、実践経験を積むため、本学の併設幼稚園の預かり保育の時間に、大学に招待しおはなし会を開催した。幼稚園の子ども達にとっては知っている絵本も多く、絵本ごとの子どもの反応を確認することができた。





(2) 門真市立図書館 おはなし会

日時：2023年3月12日（日）11時～11時30分

場所：門真市立図書館 2階

参加者：親子約26名

当日の様子：大型絵本「いただきバス」の「こちょこちょこちょ」というセリフに合わせて親子が子どもをくすぐったり、親子で一緒に手遊びをしたりする姿が見られ、本学学生は絵本を通して親子がつながる様子を体験することができた。家庭での読み聞かせのきっかけになるよう、読んだ絵本を最後に紹介し、図書館にもあることを伝えた。



さらに、本学東本教員による短期大学の図工の授業で制作された、「はらぺこあおむし」をテーマにした作品を展示することで、おはなし会後も参加者親子が絵本の世界に浸ることができるよう促した。



4. 今後の展望

門真市立図書館や本学院の皆様のご協力により広く告知できたことから、多くの方にご参加いただき、親子の絵本への親しみや、地域住民と本学学生との交流につながった。門真市立図書館の方からも「勉強になった」と言っていた。今後は門真市以外の地域も視野に入れ、多くの親子が絵本に親しむきっかけづくりにつながるよう、貢献したい。

学生は、練習や実践のたびに聞き手を意識した読み方ができるようになってきているため、今後もさらなる実践経験が必要であると考え、2023年度の新入生のボランティア参加も呼び掛ける予定である。

また、今回おはなし会最後に公開した絵本に関する作品に多くの親子が関心を持っていたため、今後もおはなし会を実施する際は、本学教育学部の東本教員とも連携し、可能な回には絵本に併せた作品展示の実施も行うことを検討したい。

謝辞

ご参加いただいた地域の皆様やご後援いただいた門真市役所・市民文化部地域政策課の皆様、門真市立図書館の皆様、告知へ向けにご協力いただいた学院関係者の皆様、大阪信愛学院保育園・幼稚園・小学校の先生方、作品展示にご協力いただいた東本先生、足高先生、学生ボランティアの皆様、ご支援いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。



## はるのおはなし だいさくせん!!



**日時：令和5年3月12日（日曜日）**  
**午前11時～11時30分**

**場所：門真市立図書館本館 2階会議室**

**読む絵本：「はらぺこあおむし」など**  
**読む人：大阪信愛学院大学・短期大学 学生**  
**対象：乳幼児(保護者同伴)・小学生**  
**定員 30人(当日先着順)**

問い合わせ先：門真市立図書館本館  
 電話 06-6908-2828

楽しい うたも  
うたうよ！



新型コロナウイルス感染拡大防止のため、時間短縮または中止をさせていただくことがあります。当日はマスクの着用をお願いします。また、体調不良の場合は来館をお控えいただきますようお願いいたします。

大阪信愛学院大学  
しんあい教育研究ケアセンター-助成事業  
門真市立図書館共催

# 近隣の幼稚園、小学校、中学校等に対するスクールサポート事業 活動報告

齊藤 誠一 谷原 舞 村津 啓太

## 1. はじめに

多様な専門性を有する本学の教育学部教員がなすべき地域貢献は、地域の個々の学校が抱える課題に対して支援することであるといえる。地域にある大学としてのプレゼンスを確立していく上でも、連携していくことは極めて重要なことと考え、具体的サポート事業を行っていくこととした。

## 2. 目的

幼稚園、小学校、中学校等において、いじめや不登校といった学校不適応問題だけでなく、各学校種に共通の、あるいは異なる児童・生徒、教員、保護者に関わる問題を有しているが、必ずしも当該学校の教員だけでは解決できないものも多くあるのが教育現場の実状と言える。こうした中、教員だけでなく、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、スクールロイヤー、地域など含めた「チーム学校」としての多職種連携の取組みが推奨されている。これをさらに進めるために、本学が地域にある大学として、学校教育を専門領域とする教育学部教員がそれぞれに有する専門分野に関わる知見、実践経験、研究成果を強みとして、学校の要請に応じて専門的な支援を行うことを目的とする。具体的には、教員への助言指導だけでなく、教員、児童生徒、保護者等に対する多様な支援を行うこととし、5点を予定している。

- ①いじめ、不登校など生徒指導、教育相談などに関わる助言、指導、研修会
- ②学年経営、学級経営などに関わる助言、指導、研修会
- ③授業など学習指導に関わる助言、指導、研修会
- ④児童生徒を対象とした心の教育などの授業実施、講演
- ⑤保護者を対象とした講演

## 3. 活動実績

### ●ニーズ調査

<手続き>城東区、鶴見区、旭区、都島区、守口市、門真市の公立小中学校を対象に質問紙調査を

2023年1月に郵送法で実施した(小学校75校、中学校33校)。

<回答>

### (1) 目的に示した①～⑤以外に必要な具体的支援

- ・今すぐにといいわけではないが、「特別支援教育」に課題が発生することがある。
- ・iPadを使用した効果的な指導方法等、ICT関連の支援研修
- ・不登校児童に対する対応
- ・本市では、外国にルーツのある児童生徒の自尊感情を高めることや多様性を認め合う仲間づくりの一環として多文化共生学級を設置し、放課後に外国籍又は外国にルーツのある児童生徒が活動する場を設けている学校が多い。近年課題となっていることは、外国にルーツのある国の多様性が進んでいることで母国(ルーツのある国の言語)文化を教えてくれる講師が見つからない。留学生の派遣など連携していただけるとありがたい。
- ・コミュニティスクール(地域・学校・保護者連絡)を対象とした教育や発達に関わる講演。

### (2) 外国人児童生徒に関わる困りごと

- ・外国にルーツがある児童で、事情により就学前施設に通っておらず、日常会話はさほど問題ないが、入学当初はひらがなも読めず数もうまく数えられなかった。今も計算は苦手であり、助詞もうまく使えていない。
- ・1～3年生には、日本語支援教員が25時間は派遣され、保護者との通訳(学期末懇談会等)支援はあるが、それ以外でも必要な場合があり、困っている。
- ・保護者とのコミュニケーションの取り方や、学校からの配付文書を理解してもらうに困っている。
- ・子どもたちは日本語を話せ、授業も日本語で受けている、保護者の中には十分に日本語を理解していない方もいる。懇談時に通訳をつけることもできるが、通訳の人材確保が課題である。子どもが通訳してくれる場合もあるが、日本語が母語となっている子どもの通訳はつたなく、保護者が違う意味にとらえてしまうこともある。

・日本語は話したり聞いたりできるが、母語を忘れていたり知らなかったりするので言葉を教えてほしいという要望がある。

・日本語指導員の来校回数を増えてほしい。

<調査からわかったこと>

当初想定していたサポート以外にも、発達障害児童生徒への支援、ITC 関連の研修、外国にルーツをもつ子ども及びその保護者に対するサポート、また教員が彼らに対応していく際の言語的サポートが求められていた。

### ●サポート事業

年度内に実施が求められたサポート

(1) 虐待防止教育の授業実施

・実施日：2023年3月6日(月)

・実施校：大阪市立中浜小学校

・対象学年：2年生、4年生

・授業者：村津啓太

指導補助者：谷原 舞

・授業目標

①身体的虐待について理解している。【知識・理解】

②身体的虐待に遭遇した際に、助けを求めることができるようになる。【態度】

・授業観

本授業では、養育者から子への「身体的虐待」についての理解を深め、自分や友人がこうした被害に遭遇した際、周りの大人に相談しようとする態度の育成を目指し、以下の3点に重点を置いた指導を行う。

①具体的な事例を通して学習を展開する。毎日母親から暴力を受けて体に痣ができてしまった太郎を登場人物として、太郎がだれにも相談できず、一人で悩むという現実が起こり得る状況を設定し、児童がイメージしやすいようにする。

②太郎の葛藤について学級全体で考えさせる時間を充実させる。家族という身近で大切な存在から虐待されている児童は、自ら助けを求めることが困難である。この太郎の葛藤を学級で共有した上で、勇気を出して相談することの大切さについて考えていく。

③周りの人に相談することで、虐待が解決に向かうこと、周りの大人は味方であることを強調し、実際に虐待に遭遇しても、助けてくれる様々な立場の人がいることを伝える。

### 4. 今後の展望

潜在的には、個々の学校が有する課題は多く、支援を求めていると思われるので、支援を要請しやすい体制を作るとともに、教員自身も教育実践の場にアウトリーチしていけるフットワークが必要と言える。また、学生のボランティア要請も多いので、これと合わせて連携が求められていると言える。

#### 【場面3】

ナ：実は、太郎さんはお家の人にいつも叩かれていたのです。でも、それは誰にも言うことができません。



#### 【場面4】

ナ：次の日、学校に行きながら太郎さんは悩んでいました。  
太郎：昨日も叩かれちゃったな。いつもたたくの、やめてほしいな。保健室に行って相談した方がいいのかな。。。でも、もし先生たちに相談したら、ぼくの家の人先生に怒られるかもしれない。ぼくはどうしたらいいんだろう。



## 「親子参加型連続講座」活動報告

鶴見区役所保健福祉課が主催する講座への協力事業

足高 壱夫

### 1. はじめに

本事業は、未就園児親子が楽しく学べる講習会として大阪市鶴見区役所保健福祉課が主催する親子参加型連続講座（昨年までは「親子参加型講習会」）に対する協力事業である。

例年、全3回講座としておこなわれてきたが、新型コロナウイルス感染症禍のここ数年は中止や回数を減らしての実施となっている。今年は全2回の講座になった。

### 2. 目的

鶴見区内在住のおおむね2～3歳の未就園児親子を対象とした講習会である。この講習会の目的は次の3点である。

- 1) 主に区内在住の保育園・幼稚園に通わせていなく、行政からの支援が届きにくい親子を把握し、支援できる体制を整える。
- 2) また1)のような親子同士の交流の契機とする。
- 3) 親子のふれあいを増やす。

以上のような目的を達成できるイベント（講習会）を企画・実施することである。

### 3. 活動実績

- 1) 「親子であそぼう！」

日時：1月31日(火)10時半～12時

場所：鶴見区役所3階会議室

講師：大森宏一准教授

(お手伝いとして本学教員3名)

参加者：1～3歳の子どもたち14名とその保護者



はじめに、講師が用意した子どもたちの名前を書いた名刺を参加者で交換しあって挨拶を交わし、その後、ちょこちょ電車、宝物探しのゲーム、新聞

紙での帽子作り、ちぎってビリビリ、パラバルーンを使った親子のふれあい運動、最後に電子ピアノの伴奏にあわせて「にじ」を歌って終わった。

- 2) 「親子でふれあう、絵本とわらべうた」

日時：3月17日(金)10時半～12時

場所：鶴見区役所3階会議室

講師：谷原舞講師と学生ボランティア2名

参加者：1～3歳の子どもたち8名とその保護者



やりとり遊び「だるまさん」、「はい、どうぞ」等で参加者の気持ちをほぐした後、本学教育学部学生ボランティアによる「おはなし会」で、「みんなでぼん」（紙芝居）、「おべんとうなあに」（絵本）、「いただきバス」（大型絵本）の読み聞かせを行った。少し身体を動かした後、親子で絵本の読み聞かせを行い、最後に、わらべうた「あがりめ さがりめ」、「ちょちょあわわ」等をみんなで歌って終了した。

### 4. 今後の展望

次年度は、新型コロナウイルス感染症以前の3回シリーズの「親子参加型講習会」に戻りたいとの依頼もあり、年間計画を立てて、実施の方向で検討していく。

公民連携子どもの居場所「子ども LOBBY」  
「保育園・幼稚園の先生体験」講座

足高 竜夫

1. はじめに

昨年2月15日に締結された「門真市と学校法人大阪信愛女学院との包括協定に関する協定書」を機に門真市こども部こども政策課からの打診を受けて企画・実施した。同課が大学や企業などと連携して実施するキャリア教育イベントである。

2. 目的

子どもたちが、自らの将来をイメージするきっかけの一つになることを目的とした職業体験をはじめとするさまざまな体験を子どもたちにしてもらうこと。

あわせて、進学先として大阪信愛学院大学を知り、関心を持ってもらうこと。

3. 活動実績

「保育園・幼稚園の先生体験」講座

日時：10月16日（日）13時30分～15時

場所：イズミヤ門真店2階イベントスペース

講師：大阪信愛学院短期大学講師・程野幸美

参加者：小学校1年生から6年生の子どもたち15名とその保護者。

定員15名に対して、申し込みは、16名（小学1年生：5名、小学2年生：1名、小学3年生：4名、小学4年生：4名、小学5年生：2名、小学6年生：1名）。当日、1名欠席。



講座では、「手遊び」「紙芝居」「劇遊び」をとりあげ、子どもの年齢によって、保育園・幼稚園の先生は言葉掛けを変えたり教材を変えたりすること、そこにはどのようなねらいがあるのかを説明し、そのあと参加者に先生役・子ども役を体験してもらった。



「劇遊び」では、楽しく体を動かしながら行える「おおきなかぶ」を保護者の方にもお手伝いいただき、子どもたちに体験してもらった。

講座終了後、保護者がお子様をともなって講師のところへ来られ、「保育士になりたいと言ってます」と声をかけて帰られた。

アンケートでは、「参加してよかったか」の問いに対し、全員が「とてもよかった」「よかった」と回答していた。自由回答では、「くわしくおしえてもらえたので、すごく分かりやすかったです。1～3さいくらいの子には、指や手などを使って教えるのが自分では楽しいと思ったし、子どもたちにも楽しいんじゃないかなと思いました」「幼稚園の先生は手や体で物をおしえると初めて知った。年齢によって言い方を変えるのがすごいと思った」という声があった。



4. 今後の展望

次年度もイベント参加の確認があった。本学の場合、キャリア教育の対象として、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭・看護師があるので両学部と相談して次年度の内容を考えたいと思う。

## 「教育相談(のぼら)」活動報告

齊藤 誠一 芝 誠貴 智原 正行

### 1. はじめに

昨年度、しんあい教育研究ケアセンター開設と同時に、大阪信愛学院短期大学児童教育研究所の教育相談部門「のぼら」を継続し、今年度で2年目を迎えた。城東区・旭区・鶴見区を中心に地域社会の幼児・児童の健やかな成長を支援することを通して、より良い社会の実現に貢献する目的を継承し活動を行っている。

とくに今年度は、2年以上続いた新型コロナウイルス感染症禍の影響が落ち着きを取り戻しつつある状況ではあったものの、感染前と比較すると、少なからず影響を感じる相談ケースがみられた。それら1年間の詳細をまとめ報告する。

### 2. 事業の目的

本事業の目的は次の2点である。

- 1) 地域の子育て中の保護者や家族を対象に教育相談を実施する
- 2) 地域のニーズに応え、地域貢献を目標とする  
具体的には「子育ての仕方や子どもの対応に迷っている」「ことばの育ちが気になる」「幼稚園(または学校)に行きたがらない」等、地域の保護者・家族の方々の子育てや、子どもの育ちに関する不安や悩みに耳を傾け、子ども達の健やかな成長・発達を共に願い、共に考えていくことを目的とする。

### 3. 方法

方法：週1回、午前・午後に対面及び電話による教育相談(家庭や保育所、幼稚園、学校における子育て・子育て・教育などの相談)を実施  
対象：幼児・児童・生徒(中学生)をもつ保護者およびその家族  
場所：本センター相談室  
期間：2022年4月1日～2023年3月31日

### 4. 活動実績

今年度の教育相談活動は、経年に亘る継続相談ケースが多くを占め、新規相談は1件のみの実施に留まった。利用総件数は、昨年度に比べ3件少ない4ケース14件の実施であった。また、継続中の対象児が小学校に就学したこともあり、相談の対象が幼児よりも児童が上回っていた。総件数が少ないため傾向を見いだすことは困難ではあるものの、電話相談

と対面相談の割合をみると、本相談室においては前者の方が昨年に引きつづき多いこと、友だちとのかかわりの減少に不安を感じている年長児・保護者の新規相談ケースがみられたことなどから、三密を意識して生活せざるを得なかったコロナ禍の影響の余波を少なからず感じるものであった。相談件数の内訳と相談内容、利用状況の詳細は次のとおりである。

#### 1) 相談[対面・電話] 件数

総件数 14 件 [対面 4 件、電話 10 件]

継続相談：3 ケース 13 件

新規相談：1 ケース 1 件

#### 2) 主な相談内容と対象児の年齢

幼児：1 ケース， 児童：3 ケース

- a. 子育ての在り方に関する家族からの相談：10 件  
[継続・電話相談]
- b. 障害のある児童の発達上の相談：1 件  
[継続・対面相談]
- c. 障害のある児童の学習や教育上の相談：2 件  
[継続・対面相談]
- d. 友だちとの関わりが気になる幼児の子育て相談：1 件 [新規・対面相談]

#### 3) 利用状況

夏期休暇・冬期休暇等の長期休暇を除き、概ね毎月1件ずつの利用状況であった。4～6月に関しては2件ずつの利用があり、2月の利用者はいなかった。

### 5. 今後の展望

今後の展望としては、しんあい教育研究ケアセンターの他の事業と関連させながら教育相談を実施するなど、地域のより多くの方に利用可能な設定を工夫することを目指し、子育て中の保護者および家族の相談ニーズに応えていきたい。

### 謝辞

一年間、教育相談の活動に携わっていただきました全ての方に心より感謝を申し上げます。

最後に、教育相談(のぼら)相談員として、また児童教育研究所所長として長きに渡りご指導を賜り、今年度をもってご退職になられます智原正行教授に心より御礼申し上げます。



